

総合活動型日本語教育と私

協働的コミュニティーの設計、運営者としての日本語教師

古屋憲章

■ はじめに

私は今学期、「日本語教育実践研究(9)」を履修した。この「実践研究」に参加する実習生は、「私にとって総合活動型日本語教育とは何か」を副題としたレポートを執筆する。そのレポートは、(1)「自分にとって総合活動型日本語教育とは何なのか」について、「仮説」を立てる→(2)その仮説を基に「対話」をする→(3)「対話」を基に「仮説」を検証し「結論」を書く、という流れで執筆される。私もこの流れに従い、「仮説」を立て、「対話」を行った。また、一学期間、実際に「総合3-6」のクラスに実習生として参加し、そこで体験した様々なことを基に実習生及び細川先生と議論を重ねた。その結果、私が最初に立てた「仮説」は、確実に変容した。以下に、私ができるような「仮説」を立て、それがいかに変容していったかについて述べていきたい。

■ 1. 仮説

人は何のために第二言語を習得しようと思うのだろうか。その目的は、多くの場合「その言語を使って他者とコミュニケーションができるようになること」ではないだろうか。場合によっては、「試験に合格するため」とか「言語そのものを研究するため」といった場合もあるだろう。しかし、それはあくまでも二次的なもので、第二言

語を習得しようと思う以上、「コミュニケーションはできなくてもいい」という人は、まずいないだろう。そのように考えると、日本語教師の最も重要な役割は、「学習者の日本語によるコミュニケーション能力の育成」にあるはずである。

私は大学院に入学する以前、民間の日本語学校で就学生を対象に、主に文型積み上げ式の授業を行っていた。しかし、そこで経験を積み重ねるほど、「自分の授業は、学習者の日本語によるコミュニケーション能力の育成に役立っているのだろうか」と自分の実践に疑問を感じるようになった。

大学院に入学し、細川先生の「言語文化教育研究」を受講した。そこで先生の講義を聴き、他の受講生たちと「言語」「文化」そして「言語文化教育」について話し合う中で、私は自分が今まで「言語によるコミュニケーション」について真剣に考えたことがなかったことに気づき、改めて考え始めた。

「言語によるコミュニケーション」とは、〈「私」が考えていること（＝内言）を表現する（＝外言化＝話す、書く）→「他者」によって表現されたもの（＝外言）を知覚し、理解する（＝内言化＝聞く、読む）〉という「表現」と「理解」のプロセスを「私」と「他者」との間で繰り返すことである。これは、母語であっても、第二言語であっても基本的には同じである。

私はそれまで漠然と、学習者の日本語によるコミュニケーション能力の育成のために重要なことは、教師が教材を通して日本語に関する知識（例えば、ある文型の形式や用法、教師が必要と判断した語彙等）を与えることである、と考えていた。しかし、「教師が日本語に関する知識を与えることが学習者のコミュニケーション能力育成にとって、本当に重要なことなのか。大切なことは、「私」について自由に表現することを保証された場所（＝協働的コミュニティ）で、学習者自身が「表現」と「理解」のプロセスを「私」と「他者」との間で繰り返すことではないか」と考えるようになった。

以上の経緯から、私は現在、日本語教師の役割を(1)日本語学習者が（コミュニティ内共通言語としての）日本語によって相互に「私」について表現する活動を繰り返すことができる協働的コミュニティを設計し、運営すること、(2)コミュニ

ティー内において、学習者が「私」について表現する活動をサポートすること、と考えている。私にとって総合活動型日本語教育とは、〈(上記 (1)(2) の)「日本語教師の役割」を自覚した日本語教師によって設計、運営される「(コミュニティー内共通言語としての)日本語によるコミュニケーション活動の場」そのもの〉である。

私は上記の「仮説」を執筆したとき、至極単純に、教師が学習者に表現の自由(=「何を言ってもいい」ということ)を保証し、その上で教師が学習者に表現上の手助けをするような場所を設定しさえすれば、学習者からするすると表現が出てくるのではないか、というふうに考えていた。

しかし、「対話」や自分の実習生としての体験、他の実習生たちとの議論を経た現在では、「学習者が「私」について表現する」ということは、それほど単純なことではないということがわかった。この時の私は「学習者が「私」について表現するとは、どのようなことなのか」「なぜ学習者が「私」について表現することが必要なのか」「学習者が「私」について表現するために、教師は何をするのか」というようなことについて何も考えていなかった。この後の「対話」を通して、私はそのような問題について、考えさせられることになる。

■ 2. Sさんとの「対話」

—2004年6月1日 16:00～17:00 早稲田大学22号館8F会議室にて—

2.1. 「対話」の相手としてSさんを選んだ理由

Sさんは、細川先生が早稲田大学本庄高等学院の三年生を対象に行った「日本語総合」の授業実践ドキュメンタリー『わたしを語ることを求めて』の著者である。私がSさんの著書を読んで最も印象的だったのは、「総合」をあくまで冷静に、客観的に観察するSさんの視点であった。その視点は、実践の当事者としての教師の視点ではないように感じた。そのような当事者としてではない視点から「総合」を見ているSさんと「対話」することによって、自分が持っている「総合」像とは全く違うもの

が見られるのではないかと考え、私は「対話」の相手としてSさんを選んだ。

なお、以下の「対話」中の「本」は、全て『わたしを語ることばを求めて』を指している。

2.2. 「総合活動型日本語教育」における教師の役割

S: うーん、環境を設計するとか、学習者の人たちの間を調整するとか、っていう役割なんですけど、私自身は、細川先生の言語教師としての実践で一番魅力を感じているのは、「〇〇人はなんだ」とかいうときに非常に強くつつこむところ。だから、私は最終的に、レポート書いてて、日本人とは何々だって結論づく場合もあると思うんですけど、でも、それがその人の本当に言いたいことだから、そういう結論でいいんじゃないかっていうふうには言えません。それだったら、実践の意味はないと思っていて、だから、ことばを出させるっていうのは、わりとニュートラルな考え方だと思うんですけど、細川先生自身はそんなに言っていないし、気づいてないかもしれないけど、かなり個人的な文化っていうのをレポートの中でも書かせようとしていると思うんです。そこは、まあ何でも個人っていう単位でくっついていいかっていうのはありますけど、その到達点はずらしちゃいけないんじゃないかなあと。個人のことばを交換すれば、自然に一人ひとりの姿が見えるみたいなのは、私は幻想だと思っていて、やっぱりあるカテゴリーみたいなので人を見がちではあるので、その人そのままをことばを通じて受け取っているのは、とても難しいことなので、そこで教師が強ク「それはどこにあるのか」とかいうふうにきくっていうのは、私にとって欠かせない。で、「本当はこういうこと言いたいんじゃないの」っていうふうに導いていくっていう方法もあると思うんですけど、そこを、知識は与えないけど、考え方として学生にぶつけるっていうところが一番魅力的だなあ、と思ってるんです。

古: 教師が積極的に一般論に対して疑問を提示することによって、学習者の今までの考え方を変えるところに、一番の（教師の）役割がある。

S: うーん、まあ肝はそこかな。それと同時にいろんなことが起こっているから、おもしろいんだと思うんですけど。それと同時に、個人は多様でそれぞれ違うよっていうただの結論にすぐに持っていかないで、そういうカテゴリーみたいなのをあなたは持っていて、本当にそれはそうなのか、って問いかけつつ、じゃあ、

インタビュー（＝「対話」）の相手をじっくりと一人の人として見てみようっていう活動が同時にあるじゃないですか。（教師が）考えをぶつけるっていうのと、実際にその人と話し合うっていう。そこが二本そろっているっていうのがおもしろいかなあ。

古：あ、もう一回・・・

S：あのう、他文化主義の本とかいろいろ読んで「一人ひとり人間は違うよな」って思うやり方もあると思うんですけど、「本当に一人ひとり違うんじゃないの」っていう教師の積極的な働きかけ、と同時に、勉強している学習者の人たちが実際に本当の人にあって話しをする。その組み合わせが独特のものかなあ。

古：教師が一般論に対する疑問を投げかけつつ、それを学習者も自分で検証するっていうシステム。

S：そうですね。

古：そこが「総合」の肝じゃないかと。

S：うーん、魅力かなあ。

古：とすれば、一番の重要な（教師の）役割っていうのは、疑問を投げかけること。それがなければ、つまり揺さぶりが無い状態でインタビュー（＝「対話」）したとしても、結局検証することにはならないっていうことですか。

S：と思います。

上記のSさんの発言は、「対話」冒頭の「総合活動型日本語教育」における教師の役割をどのように考えているか」という私の質問に答えてのものである。この中でSさんは、教師の役割を「教師の最も重要な役割は、学習者が提示する一般論に対して、疑問を投げかけることである」とした後、「学習者が「私」について表現する（＝レポートを作成する）とは、レポートの中でそれぞれの「個の文化」を書き表すことであり、「個の文化」を表現しない「総合」に意味はない」と答えている。

「総合」において表現することとは、「個の文化」すなわち「一般論ではない自分に固有なもの」を書くことである」ということに、私は衝撃を受けた。なぜなら、私は「個々の学習者が自由に表現しさえすればそれでよい」と考えていたからである。なぜ「総合」において、学習者は「一般論ではない自分に固有なもの」を書く必要が

あるのだろうか。この点について、さらにSさんにきいた。

2.3. 「総合活動型日本語教育」の目的

S: 一人ひとりと実際伝えることができるようなコミュニケーション活動を行うっていうのは、非常に大きな目的だと思うんですけど。じゃあ、一人ひとりをよく見るっていう、一人ひとりの話をよくきくっていうときに、そこに邪魔になるものがあるって、で、そこに対して働きかけを行うっていうプロセスなしで、その人に向き合えるだろうか。向き合える人というか元々それほど邪魔になるものがない人もいると思うんですけど、そこは私は切り離せないと思ってるんです。それ自体が目的っていうのではないのですけど、うーん、必ずいる、いるのではないかと。

古: 確かにそこを抜いたら、さっきから言っているようにありがちな活動(例: 個々の学習者が興味あることについて、アンケート等を用いて調査、考察し、発表する活動)になってしまうと思うんですね。僕がここ(=「仮説」)で書いてるのは、結局枠組みを作るっていうことなんですね。だから、今思ったのは、それに加えて、やっぱり「剥ぎ取り」(=学習者が提示したステレオタイプなものの見方に対して強烈な突き上げを行うこと)が要るのかなあって。この本の中にもあるように、これは細川先生がそうなのかもしれないですけど、「日本人らしい」とか言うとき、そこには冷静さを欠いたような形で激しいつこみをするっていうのが書かれてたんですけど、それこそが、細川先生どうこうではなくて、「総合」の肝じゃないかっていうことですか。Sさんは。

S: うん、私にとってはそうです。この活動からそれを抜いちゃった形では、ただの文章支援になるので、それはいいレポートは書けるかもしれないけど、その実践に出て揺さぶられるような、全然考えたこともないようなところから、自分の今まで持っていた視点みたいなのを覆されるような、そういうほかでは得られないような経験はそんなないんじゃないかなあと。

上記の「対話」の中でSさんは、「一人ひとりのことばをよく聞くとき(=コミュニケーション活動を行うとき)に邪魔になるもの(=一般論)がある。自分の中にある一般論に意識的になるというプロセスなしで、他者と向き合うことができない。」

と述べている。また、Sさんの言う「自分の今まで持っていた視点が覆される」というのは、「自分の中にある一般論に意識的になることによって、一般論から離れた自分だけの価値観に気づく」ということではないだろうか。

「一人ひとりのことばをよく聞く」「他者と向き合う」とは、「他者の価値観に触れ、自分の価値観を提示すること」、すなわち「価値観の交換」を行うということである。そして、それは「自分の中にある一般論に意識的になり、自分だけの価値観に気づくこと」によって、はじめて可能になるのである。

それでは、学習者間でお互いの価値観が交換されるような密度の濃いコミュニケーション活動を促すために、教師は教室という場で何をやる必要があるのだろうか。

2.4. 「総合活動型日本語教育」の教室と教師の人間観、言語観の関係

古:この(=「仮説」)中にも書いてあるんですが、「協働的コミュニティーの形成」っていうのは、結局、Sさんの本の中で言えば、「主人公の転換」。最初はある程度教師が引っ張って置いて、途中で変わって、実際仲良くなったかどうかは別として、その場でのコミュニティーが形成されたって状態だと思うんですけど、今までお話されたことの中にもあると思うんですが、そのために教師は何ができると思いますか。

S: 批判を言っても大丈夫とか、ああいう雰囲気作りっていうのは、どうすればできるのか。うーん、細川先生を見てる限りでは、相手を、日本語学習者に対して、誰に対しても子供扱いはしないってスタンスはあると思うんですけど。うーん、だからこそ、わりときついことも言えるし、言ったら傷つくんじゃないとか、もちろん感覚的に暴言を吐いたりとか、その人を追い詰めるようなことは、絶対言わないと思うんですけど。うーん、そこが難しくて、批判したり、ばあつとやってるようで、相手に恐怖感を抱かせないですよ。そこをテクニクとしては語れないし、それは相手から帰ってくることも当然自分は受け止めるっていう強い信念というか、そういうのに支えられているのかなあ。なんか批判をするのに抵抗はないですよ、細川先生に対して。私は全然「何を言っても大丈夫そうだな」と思うんですけど。先生に対して手加減をしなくていいわけですよ、学生

にとっても。そういう安心感とかは、学生どうしも言ったら言っただ、言われたことをきけるところはきいてとか、意見もらってありがたいというような雰囲気になるっていうのもあるだろうし、そういうの、教師の役割っていうふうには、ちょっとなかなか言い切れないっていうか、まあ、持つべきことばを交わすときの基本的な人間観とか言語観のスタンスとしてそういうのを持っている。それに基づいて、教室みたいのを作っていく。活動とか一つひとつの介入にしても、そういうのから出てるんじゃないかなあ。

古：つまり、批判されても動じないとか、あるいはこっちがきついこと言っても学習者に安心感を与えるというのは、Sさんの考えでは、根本にその人の人間観とか言語観とかがあって、それでそこから出発しているから、だからそういう雰囲気になるんじゃないか。

S：うーん、と思うんですけどね。

学習者が「一般論から離れた自分だけの価値観に気づいた」としても、教室の場に「何を言っても大丈夫」という雰囲気がなければ、それを表現することは難しい。「そのような雰囲気を作るために、教師に何ができるのか」という私の質問に対して、Sさんは「私が見た「総合」に関して言えば、それは細川先生の「誰に対しても子供扱いしない」とか「相手のことばを必ず受け止める」というような信念から醸し出されているのではないか」と答えた。

Sさんの答えを聞いて、教室には、その教室を設計した教師の言語観や人間観が反映される、といういわば当たり前のことに改めて気づかされた。そして、だからこそ教師は、自分がどのような言語観や人間観を持っているのかということに意識的になり、常に自分の言語観や人間観と自分が設計した教室を照らし合わせていく必要があると考えた。

2.5. 「総合活動型日本語教育」の本質

古：僕自身、本を読んで、まあ実際に見てても思うのは、教師って考えた場合、どうしても、Sさんも書いていらっしゃったように、親切にわかりやすくするべき

じゃないかなっていう考えが先にあって、で、やっぱり、僕は突き放したりっていうのは、なんか難しいなって、論理的に問い詰めたりっていうのが。それで、当たり前ですけど、そういうふうに問い詰めていけば、混乱するわけじゃないですか。で、混乱は表情とか態度に表れますよね。そしたら、僕がだめじゃないかって。

S：ひるんでしまう。うーん、そうなんですよ。ひるませるっていうのを、教師のそれこそ押し付けだと考える人もいるわけですよ、周りから見た場合。そこは、もう「個人を一人の人間として見る視点を育てるんだ」という明確なスタンスがあるから、それは正に押し付けなんですよ。押し付けとか教育の方針として、実際あるんですよ、たぶん。だから、そこを「僕は何もしませんよ」と言ってしまうんですけど、先生は、そこはそういう教育をしているんだと、言ってもいいんじゃないかな。一人の人間として相手とコミュニケーションするという視点を育てるために、私は敢えて揺さぶるようなことをしているんだって。そういう目的を正に自分が押し付けているっていうのは、それでいいんじゃないかなあと。でも、言語自体を教えるわけではない。もっと大事な別の教えることがある。「教えてない」というのは、うそだと思うんです。

古：そう考えると、日本語教育とかいう枠じゃないですよ。

S：うーん。言語教育とか、コミュニケーション教育になっちゃうんですけど。

古：もっと広い話すれば、Sさんも書いていらっしまったと思うんですけど、自分のことばで表現し続けるってことは、すなわちそれは生きていくってことじゃないかと思って、何て言うか、生きる力教育っていうか、そうになったら。まあ、はっきり言って、いわゆる日本語教育と考えられているものは、知識を得て、道具として使えるようにすればいいっていう考えじゃないですか。そういうふうに自分の考えを相手にわかるように表現していくっていうことは、つまり生きていくことだと。なんかそこまで踏み込んで、誰もいないと思うんですけど。

S：うーん、そうですね。ある日本語教育という専門分野みたいなのを作ろうという気運が高いとか、学際的な分野だからこそ、何とか自分たちの学問的アイデンティティみたいなやつを作ろうっていう傾向はすごい強いと思うんですけど。この本の狙いは、細川先生の自覚していない教育的な明確なスタンスっていうのを、私はもっと出したかったんです。

ここで私はもう一度「教師の役割」というところに戻って、「教師が学習者の提示する一般論に対して、疑問を投げかけることの難しさ」について、Sさんはどのように考えているかについて質問した。Sさんは「総合」には、「相手を個人として捉え、お互いに個人としてコミュニケーションできるような人に学習者を育てる」という明確なスタンスがあり、そのためにあえて学習者の前提を揺さぶるようなことをしている。そのこと自体は、正に教師の押し付けでしかない。しかし、言語自体ではない、生きていくために必要な大切なことを教えていると考えていいのではないかと答えた。

教師が、学習者の提示する一般論に対して、疑問を投げかけることによって、学習者は、自ら考えざるを得ない状況に置かれる。それは、多くの学習者にとって苦痛な状態であろう。しかし、考え続け、自分の固有な価値観を意識し、意識した固有な価値観を言語化しない限り、他者に自分の立場を伝えることはできない。そして、他者に自分の立場を伝えることができなければ、他者と対等な関係を結ぶこともできない。自分の立場を相手に伝え、目の前の相手と対等な関係を取り結ぶことこそが、正に生きていくために必要な大切なことではないだろうか。

■ 3. 結論

3.1. 学習者が「私」について表現するとは、どのようなことなのか

学習者が「私」について表現するとは、学習者が単に自分の話したいことを話し、書きたいことを書くということではない。ここで言う「私」とは、「私の価値観」のことである。

「総合」において、学習者は「自分が一番興味・関心を持っている事物／人物」について（実際の活動の中では、事物の場合、「○○と私」というテーマが示され、人物の場合、「私にとって魅力的な人」というテーマが示される。今回の「総合 3-6」では、「○○と私」がテーマとして示された）、「レポートを作成する」という方法で表現す

る。このレポートで表現される内容は、「自分が興味・関心を持っている事物／人物」そのものについての情報や知識ではない。それは、〈どうして私は、世の中に存在する無数の事物の中で、ある特定の事物／人物に興味・関心を持つのか〉という「自分の興味・関心の原因」である。

「私」がある特定の事物／人物に興味・関心を持つ」ということは、「私」が生きていく上で、一番大切だと思っていること(=「私の価値観」)があり、それを実現するために、ある特定の事物／人物が持つ要素が必要だと感じることである。つまり、「自分の興味・関心及びそれに基づく具体的な行動の原因」は、「私の価値観」にあるということであり、「自分の興味・関心の原因」を考え、表現するということは、結局「私の価値観」について考え、表現することである。

このように「私」について表現するとは、学習者が「自分の興味・関心がある事物／人物」を通して、「私の価値観」を表現することである。

3.2. なぜ学習者が「私の価値観」について表現することが必要なのか

それでは、なぜ学習者は単に書きたいことを書くのではなく、「私の価値観」について表現することを求められるのだろうか。

「総合」において、学習者は、まず「動機」レポートを書き、それを基に他者と「対話」を行う。この「対話」で話すべきことは、興味・関心の対象そのものについての情報や知識ではない。もし対象そのものについて話してしまうと、その結果は、「対話」の相手が対象に関心を示さないか、または単なる情報交換に終わるかで、その人からでなければ聞けない話が聞けるということはないだろう。しかし、「私の価値観」について話せば、(本人が意識しているか、意識していないかは別にして)一人として同じ価値観を持っている人はいないので、「対話」の相手からでなければ聞けない話が聞けるはずである。このように他者から〈自分とは違う「私の価値観」〉を引き出すためには、まず〈自分の「私の価値観」〉を提示することが必要である。そして、このプロセスで、「自分の価値観」について考え、他者に「自分の価値観」をぶつけ、

それによって自分とは違う「他者の価値観」に触れることで、思考が活性化され、「自分の価値観」が更新される。「固有性」（＝オリジナリティ）とは、この〈更新され続ける「私の価値観」〉のことである。〈「私の価値観」を認識し、それを更新していくこと〉＝「自分の固有性を高める」ということこそ、「総合」の最大の目的であり、このことは常に他者とのインターアクションによる「思考の活性化」と不可分な関係にある。

3.3. 「私の価値観」と「協働的コミュニティ」の関係

それでは、「協働的コミュニティ」の形成という観点から見た「私の価値観」を表現することの意義は何だろうか。

学習者は、お互いの「私の価値観」をゆっくり時間をかけて表現し合うことによって、〈誰もが固有の「私の価値観」を持っていて、それは一人ひとり違う〉ということを経験的に認識していく。これは、学習者が日常的に行っているであろう集団類型認識（＝ある集団の構成員は共通の「価値観」を持っているという考え方で他者を認識すること）とは、全く異なる認識である。そして、メンバー一人ひとりがこの認識を十分に共有できた状態が「協働的コミュニティが形成された」状態であり、そのようなコミュニティのメンバー間には、「ここでは何を表現しても大丈夫だ」というお互いに対する信頼感が醸成されているはずである。

「協働的コミュニティ」とは、単に「メンバー同士の仲がいい共同体」ではない。それは、上記のような「信頼関係に基づいて同じ場を共有する共同体」であり、そのような共同体を形成するためには、お互いに「私の価値観」を表現し合うことが必要不可欠なのである。

3.4. 学習者が「私の価値観」について表現するために、教師は何をするのか

私は、「仮説」を立てたとき、活動の枠組みを作り、運営することが教師の大切な役割であると考えていた。しかし、「対話」や「総合」に参加した体験、他の実習生

との議論を通して、現在は「思いもかけぬ方向から疑問を投げかけることによって、学習者に自分が持っている一般論を意識させたり、論理的に問い詰めていくことによって、学習者が持つ一般論を剥ぎ取ったりすることが、活動の枠組みを作り、運営すること以上に大切な教師の役割である」と考えている。

そして、上記の教師が行うべきことは、全て「学習者が他者とのインターアクションを通して、自らの固有性を高めていく」という目的に基づいている。現在の私にとって「総合活動型日本語教育とは、学習者が他者とのインターアクションを通して、自らの固有性を高めていく場そのもの」である。

■ おわりに — 私にとって「日本語教育実践研究 (9)」とは何だったか

私は「実践研究 (9)」を通して、「協働的コミュニティーとは何か」ということを体験的に学ぶことができた。毎週水曜 18 時からの実習生どうしの議論では、お互いの「価値観」をとことんぶつけあい、その結果として、何でも言い合える時空間が出現した。これまで私は、「協働的コミュニティー」を何となく仲が良くなることぐらいに考えていた。しかし、「実践研究 (9)」での議論を通して、それは必ずしも仲が良くなることではなく、「何を言っても大丈夫」という信頼関係が醸成されることなのだ、ということを実感した。

本当にすばらしい時空間でした。なくなってしまうのが惜しいほどに。けれども、永遠に続く時空間もまたあり得ないので、仕方ありません。誰一人いなくても、このような時空間は出現しなかったと思います。私にこのような時空間を与えてくれた全ての実習生の皆さん、そして細川先生に感謝します。本当にありがとう。

そして、最後に私の思考を活性化させ、「私の価値観」の更新を促してくださった「対話」相手の S さんに心から感謝します。S さんとの「対話」を経験したことで、また一歩前へ進めたような気がします。

参考文献

性川波都季・細川英雄 (2004) 『わたしを語ることは求めて—表現することへの希望』 三省堂

細川英雄 (2003) 『「総合」の考え方と方法』 第 1 章 個の表現をめざして—レポート作成「○と私」 早稲田大学日本語研究教育センター